

大学生の両親イメージと家族機能
による自我同一性の形成について

2008

浅井伸彦

目次

I 歴史的概観	1
II 問題と目的	8
III 方法	11
IV 結果	16
V 考察	43
VI 結論	59
VII 要約	61
VIII 引用文献	62

I .歴史的概観

近年、「自分が何をしたいかわからない」と転職を繰り返す若者や、フリーターを続ける若者、さらには NEET[ニート] (Not in Employment, Education or Training) と呼ばれる、通学も仕事もしておらず職業訓練も受けていない(内閣府,2005)若者まで増えてきており、今や無視することのできない社会問題となっている。

この問題を考えるにあたって、Erikson.E.H.(1973)が提唱する青年期の発達課題である自我同一性(identity)という概念は多くの示唆を与えてくれる。青年期では、「同一性対同一性拡散」という心理・社会的危機をもち、具体的には成人社会にどのような形で参入していくかを決定しなければならない。この同一性にはこれまでの自己との斉一性と連続性をもたなければならず(斉藤,2002)、自我同一性の獲得に失敗した結果として、このような若者が増えているとも思われる。前述した若者らに関する社会問題が、必ずしも若者の自我同一性の拡散によってのみ発生しているとは言えないが、このことを考えるにあたって、職業的な自我同一性を達成することが、職業の獲得につながると考えられるため、有用な概念であると考えられる。Marcia.J.E.(1966)は、

この自我同一性という概念を具体的に捉えるため、同一性地位 (identity status) という考え方を提唱した。Marcia は心理社会的領域として、職業観、宗教観、政治観を設定し、「危機 (crisis)」を経験しているかどうか、「積極的関与 (commitment)」をしているかどうかということの組み合わせにより、同一性達成 (identity achievement)、モラトリアム (moratorium)、早期完了 (foreclosure)、同一性拡散 (identity diffusion) という 4 種類の自我同一性地位を見出した。この同一性地位を測定するための質問紙が加藤 (1989) によって作られ、この概念も幅広く研究の中で取り扱われてきている (中村・秋葉, 1992; 丸山・奇, 2006 など)。

青年が自我同一性を獲得していく過程では、様々なものに影響を受けていると考えられる。その中でも家族は、生涯にわたって関わり続ける最も身近でミクロな集団ととらえることができ、このことから自我同一性の獲得に及ぼす影響は少なくないと考えられる。

家族そのものが家族成員に及ぼす影響については、心理臨床の中でも 20 世紀後半になってから、特に注目されてきている。もともと精神分析では、治療の焦点は個人に当てられていた。しかし、精神医学の分野ではサリバン (Sullivan, H.S.) が「精神医学

は対人関係論である」として、特に母子相互作用に焦点を当て、精神分析の領域でもアドラー（Adler,A.）が人間を社会的存在として捉えるなど、個人から対人関係へ焦点が移っていった。そして 1950 年代、さまざまな領域から一気に家族への注目を促す実証的な研究が発表されるようになる（長谷川・若島,2002）。また、統合失調症の家族に対する研究は、基本的に家族の病理性についての研究が多く、その病理性を説き起こし解釈するという作業と、病理性自体をどの様に変化させることが出来るか、という二つの側面を持つものであった。これらの研究によって、「家族内のコミュニケーションの相互作用が、症状と密接な関わりがある」という、精神分析にはなかった視点が実証的に証明され、臨床家の「家族」というものに対しての新たな取り組みが始まり、それをも治療するという意味で「家族療法」という名称で呼ばれるようになったといえる（吉川,1993）。

家族などの集団をひとつのシステムとみなし、心理臨床活動に役立てるといふこのような視点は、以上のような家族療法的見解において、非常に有用なことでありと考えられ、このように家族をシステムとして捉えるための枠組として、家族機能という様式を示すいくつかのモデルが検討されてきている

（ Reiss,D.,1971;Olson,D.H.,Russell,C.S.,1979;Beavers,W.R.,

ビーバーズ（Beavers, W.R.）の「ビーバーズシステムモデル」では、相互作用の形態（遠心的から求心的）を縦軸に、家族の機能水準（最適から重度の障害レベル）を横軸にとり、それらの組み合わせにより家族システムを9つのタイプに分類しており、子どもの行動に関する問題と関係付けて記されている。

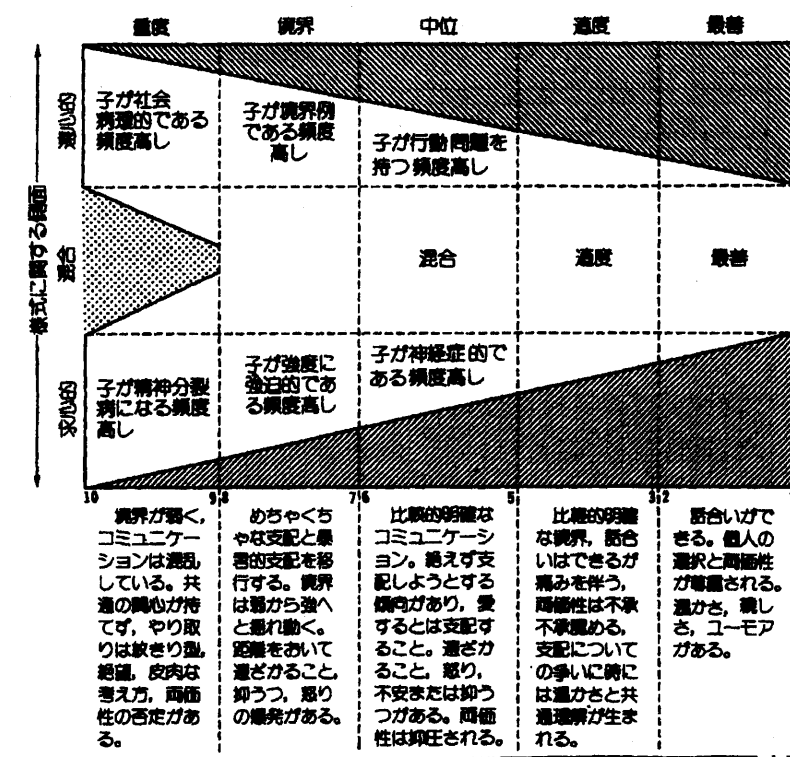


図 1 ビーバーズシステムモデル (Philip Barker, 1993)

4

に中間レベルであるもの、すなわち二軸の中心に位置する家族を最も均衡のとれたよい家族機能であるとし、逆に二軸ともに極端なレベルであるもの、すなわち二軸の外側に位置する家族を最も悪い家族機能としている。

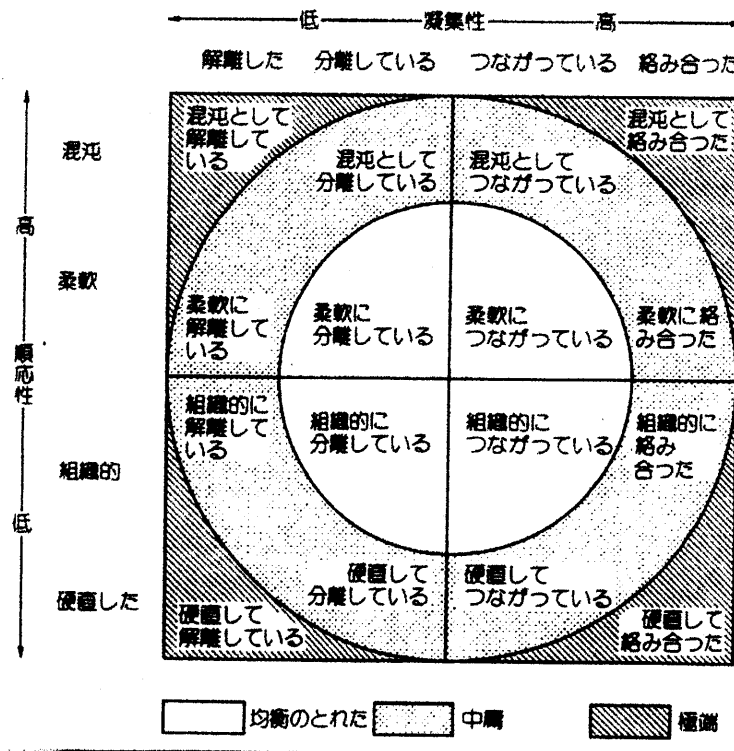


図 2 . オルソンの円環モデル (Philip Barker, 1993)

それらのモデルを念頭に置き、さらに家族機能と自我同一性の関連についての研究もなされてきた(渡辺, 1989; 中村・秋葉, 1992; 丸山・奇, 2006; 越知, 2006 など)。

渡辺 (1989) は、家族機能の肯定的側面と正の関連があるのは同一性達成と早期完了であることや、家族機能の否定的側面と正

の関連があるのは同一性拡散であることを見出し、同一性拡散は、同一性達成や早期完了の反対側に位置していることがわかった。

また中村・秋葉（1992）は、同一性地位による家族機能の大学生と高校生での違いを見ている。これにより、大学生での各同一性地位の認知する家族機能の違いが、高校生ほど顕著なものではないことが明らかになった。また同一性地位による得点差は女子の方が希薄であり、大学生の方が高校生より、また女子の方が男子より、自我同一性の確立と家族との関係について、切り離して考えられるといったことが見られた。

丸山・奇（2006）は、Family System Test (FAST, Gehringer, 1993) を用い、自我同一性地位による家族システム全体の認知の差について検討している。丸山・奇（2006）では、同一性達成地位のものは親子関係からの精神的な自立ができていること、同一性拡散地位では家族がばらばらであると認知していることが見出され、早期完了地位では、非調和的な家族機能を認知しているが、母子関係・父子関係・夫婦関係ともに肯定的に捉えていることが示唆された。

越知（2005）は、家族機能自己記述尺度（Self-Report Measures of Family Functioning; 以下 SMFF, Bloom, 1985, 渡辺, 1989 訳）と自我同一性判定尺度（加藤, 1989）を用いて「小学校の頃」と「現

在」での家族の変化も視野に入れた自我同一性の獲得への影響を見ている。越知（2005）の家族機能と同一性地位の関連では、『凝集性』は「小学校の頃」より「現在」で高く、『社会活動性』や『拘束性』は「小学校の頃」で高いこと、また『凝集性』は同一性拡散群よりも同一性達成群や早期完了群の方が高く、『社会活動性』は同一性拡散群よりも他の3群が高いことがわかった。

これら先行研究では、被験者の学校種の差や家族システム全体の認知の差、現在と小学校の頃の時系列的な差を考慮に入れるなど様々な試みがなされているが、家族機能と同時に家族のサブシステムにあたる家族成員のイメージを質問紙によって捉えた研究は、まだ見当たらない。

Ⅱ.問題と目的

家族という視点から自我同一性について考えていく際、家族をシステムとして捉えた場合の「家族機能」という視点のほかに、やはり個々の家族成員について考えることも重要であるように思われる。家族成員の中でも、両親は子どもにとって非常に大きな存在であり、児童・青年期において、子どもは両親に同一化をしていくことを通して、自我同一性を獲得していく。家族のサブシステムとしての父親・母親機能がどのようなものであるかということは、子どもにとって父親イメージ、母親イメージという形で認識されるのではないかと考えられる。東京都生活文化局（1985）の調査によると、「尊敬できる人」や「こんな人になりたい」という相手は、いずれの層においても、同性の親が多く選択されている。このことは、最も身近な両親のイメージを同一化していくことで、自我同一性の礎を築いていっていることを表す一側面を示していると考えられ、21世紀になった現在においても、同じように親のイメージが自我同一性の確立に与える影響は少なくないと思われる。

以上のことより、両親に対するイメージは自我同一性の確立には重要なものであると考えられ、本研究では一つの時点についてより多角的に見ることを目的とし、先行研究で検討が重ねられて

きた「家族機能」に加えて、「両親に対してどのようなイメージを持っているか」が「自我同一性の確立」に関連があるかを検討するために、長沢・渡辺（1996）による「親のイメージ調査尺度」を加えて検討する。

また「家族機能」を問う時点に関しては、大学生は下宿しているものも多くいるため、回答するものの居住形態によって家族との関係を捉える時期が異なることを防ぐため、高校生の頃を思い出して SMFF に回答するよう教示することとする。高校は義務教育ではないものの日本では 97% 以上が進学(文部科学省,2006)しており、高校卒業後の進路選択が実質的には最初となると考えられるため、自我同一性の確立に影響を及ぼす時期としては、高校生のころが適当であると考えられる。

本研究での仮説を以下の通りとする。

1. 両親への尊敬イメージが高い家族は凝集性が高くなる。
2. 両親への尊敬イメージや、信用してくれ見守ってくれるイメージが高いものは、早期完了地位になる。
3. 両親に対して、なんでも好きにさせてくれるイメージが強く、話しやすいイメージが低いものは、同一性拡散地位になる。
4. 凝集性や社会活動性の高い家族では、早期完了地位になる。

5. 両親への尊敬イメージが高すぎも低すぎもせず、話しやすいイメージが高いものは、同一性達成地位になる。
6. 凝集性や社会活動性が高くも低くもなく、拘束性が高すぎない家族では、同一性達成地位になる。
7. 母親への尊敬イメージが高いものは、現在の自己投入の希求が高くなる。
8. 父親への尊敬イメージが高いものは、将来の自己投入の希求が高くなる。
9. 両親に相談するものは、将来への自己投入の希求が高い。

また、父親機能や母親機能、家族機能の各因子のあり方が、同一性地位によってどのように異なるかについて探索的に検討することとする。

Ⅲ. 方法

1. 調査対象

調査対象は、近畿地方の国立大学の大学生 161 名と、同じく近畿地方の私立大学の大学生 179 名の計 340 名である。そのうち、大幅な記入もれ、記入ミスのあった 18 名を除外した。また調査対象を、高校を卒業してからそれほど歳を重ねず大学に入学した大学生に統一するため、大学院生や 30 歳以上の大学生 11 名を分析対象から除外し、欠損値が 3 つ以下のものに関しては、それぞれの項目の平均値を算出し、四捨五入した値を代入した。以上の手続きにより、有効回答は 311 名（男性 142 名、女性 169 名）とした。その内訳は、2 回生 211 名（男性 101 名、女性 110 名）、3 回生 78 名（男性 29 名、女性 49 名）、4 回生 22 名（男性 12 名、女性 10 名）であった（表 1）。

表 1. 調査対象者の性別・学年の内訳

性別	学年			合計
	2回生	3回生	4回生	
男性	101	29	12	142
女性	110	49	10	169
合計	211	78	22	311

2. 調査時期

本調査は、2007年5月から10月にかけて行われた。今回の分析においては、調査時期による影響は考慮しないこととする。

3. 実施手続き

調査の実施にあたっては、筆者が調査実施者となり、各大学の講義後に調査に関する教示を行い、質問紙の配布、回収を行った。

4. 質問紙の構成

質問紙は、フェイスシートと、親のイメージ調査尺度(長沢・渡辺,1996)、家族機能自己記述尺度(SMFF,Bloom,1985,渡辺,1989訳)、同一性地位判定尺度(加藤,1989)の3つの尺度から構成されている。

(1)フェイスシート

フェイスシートでは、性別、年齢、学年のほか、高校生の時に一緒に暮らしていた家族成員全員に丸をつけるよう指示し、兄弟姉妹については、それぞれの人数を尋ね、さらに兄弟姉妹の数と出生順、今現在の進路などの大切なことを相談する相手(母親に相談する、父親に相談する、両親に相談する、どちらとも相談し

ない)、今現在の居住形態(家族暮らし、一人暮らし、寮生活、ルームシェア、その他<自由回答欄>)について尋ねた。

(2)親のイメージ調査尺度

被験者が自分自身の親に対して、どのようなイメージを抱いているかを調べるために、長沢・渡辺(1996)による親のイメージ調査尺度を使用した。本尺度は24項目からなり、「全然思わない(1点)」から「非常にそう思う(5点)」の5件法で回答されるものである。本研究では、父親に対するイメージと母親に対するイメージを、それぞれ回答してもらうために、父親と母親に分けて、同じ質問項目でイメージを尋ねた。

(3)家族機能自己記述尺度(SMFF)

被験者が自分自身の家族について、どのように認知しているかを調べるため、Bloom(1985)による、家族機能自己記述尺度(SMFF)を渡辺(1989)が和訳したものを使用した。SMFFは、van der Veen,F.、Moos,R.H.、Olson,D.H.、Skinner,M.らによる家族調査に関する質問項目をまとめ直して作成されたものである。SMFFの質問項目は、家族機能の15の下位特性(結合性、表現性、葛藤、知的文化的態度、活動的レクリエーションの態度、宗教の

強調、秩序、家族社交性、外的統制位置、家族理想化、放任的家族形態、民主的家族形態、遊離性、權威的家族形態、纏綿性）にそれぞれ 5 項目ずつ含まれ、全部で 75 項目からなり、「あてはまらない（1 点）」から「あてはまる（4 点）」の 4 件法で回答されるものである。

(4) 同一性地位判定尺度

加藤（1989）によって作成された尺度である、Marcia の定義した「危機」「自己投入」に「将来への展望」を加えた 3 変数を測定し、それらの組み合わせから同一性地位の判定を行う、同一性地位判定尺度を用いた。本尺度では、「一般的な（領域を特定しない）『現在の自己投入』の水準」、一般的な『過去の危機』の水準、一般的な『将来の自己投入の希求』の水準となっており、領域を特定しない質問項目とされている。

以上、同一性地位判定尺度は各変数に 4 項目が含まれ、計 12 項目からなり、「全然そうではない（1 点）」から「まったくそのとおりだ（6 点）」までの 6 件法で回答されるものである。各変数は、それぞれ 4 項目の合計得点から構成される。同一性地位の分け方については、越智（2005）に準じ、各変数の平均値より高ければ高群、平均値より低ければ低群とし、『現在の自己投入』も『過

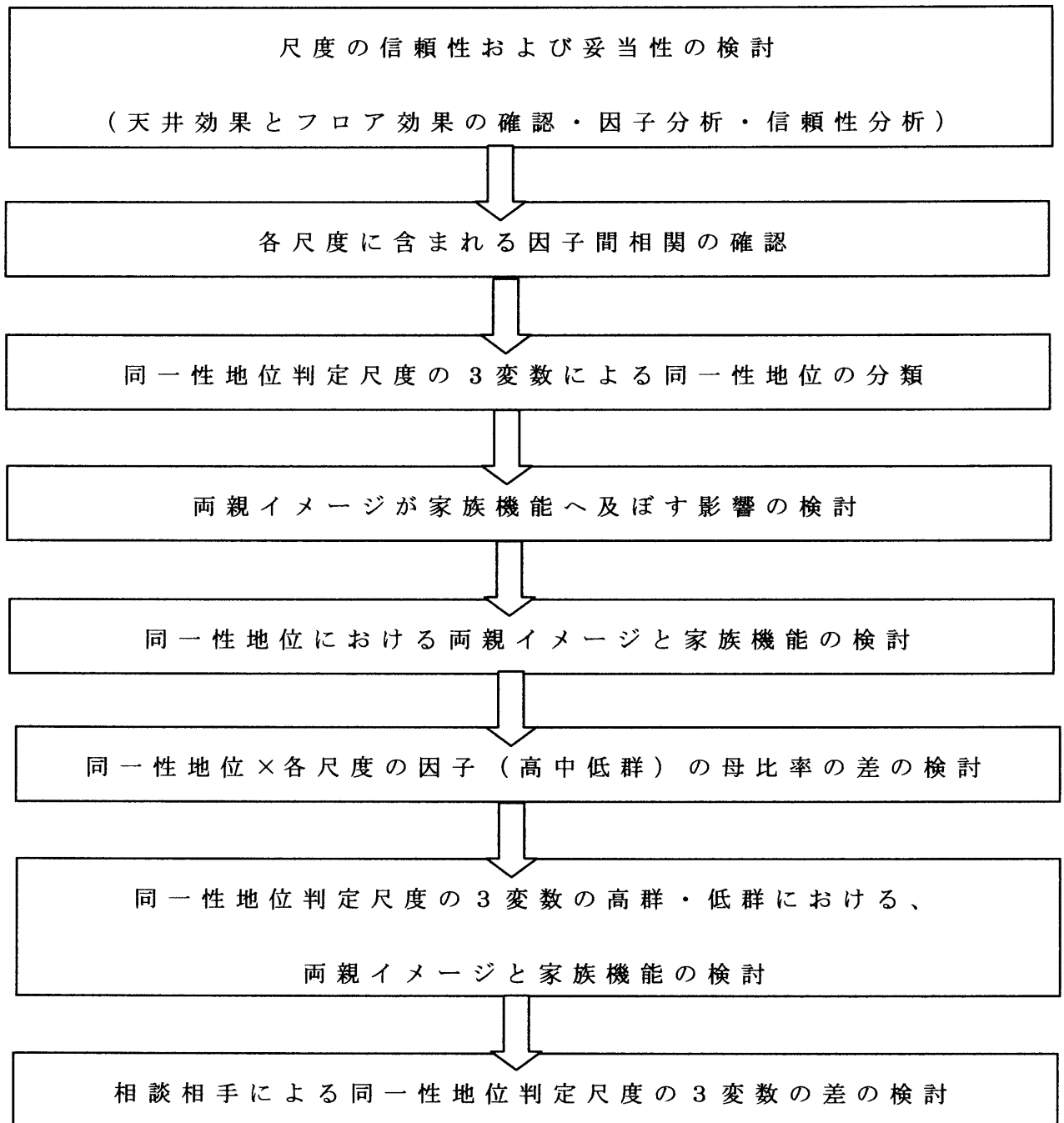
去の危機』も高群のものを「同一性達成群」、また『現在の自己投入』は高群だが『過去の危機』が低群のものを「早期完了群」とし、『現在の自己投入』は低群だが『将来の自己投入の希求』が高群のものを「モラトリウム群」、そして『現在の自己投入』も『将来の自己投入の希求』も低群のものを「同一性拡散群」と4つに分類した（表2）。

表 2. 自我同一性地位群の定義（越知, 2005）

同一性地位群	加藤の定義	群分けの基準
同一性達成群	過去に高い水準の危機を経験した上で、現在高い水準の自己投入を行っているもの	過去高群かつ現在高群のもの
早期完了群	過去に低い水準の危機しか経験せず、現在高い水準の自己投入を行っているもの	過去低群かつ現在高群のもの
モラトリウム群	現在は高い水準の自己投入は行っていないが、将来の自己投入を強く求めているもの	現在低群かつ将来高群のもの
同一性拡散群	現在低い水準の自己投入しか行っておらず、将来の自己投入の希求も弱いもの	現在低群かつ将来低群のもの

IV. 結果

0. 分析結果のフローチャート



1. 尺度の信頼性及び妥当性の検討

まず、尺度の信頼性を確保するため、天井効果とフロア効果を考慮し、各変数における最低得点より平均値 $\pm$ SDが低い項目と、各変数における最高得点より平均値 $\pm$ SDが高い項目を分析の対象から除外することとした。

次に、尺度の因子的妥当性を確保するため、親のイメージ調査尺度（父親・母親）、SMFFの因子分析を行い、内的整合性を確かめるため、信頼性分析によってクロンバックの α 係数を算出した。さらに、各尺度の因子間の相関が仮定されるため、全ての因子間でピアソンの積率相関係数を求めた。

(1) 親のイメージ調査尺度（父親）

父親のイメージについて尋ねた親のイメージ調査尺度では、「一生懸命働いている」が天井効果を示したため、その1項目を除外した23項目で分析を進めた。それら23項目について、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い、スクリープロットから読み取れる固有値の減衰状況、因子の解釈可能性を考慮し、因子数を3因子とした。また全ての因子において、因子負荷量が0.40を下回るものや、0.40以上の因子負荷量が2因子にまたがるもの2項目を削除し、21項目となった。第1因子（13項目）は、「自

分の将来について一緒に考えてくれる」「尊敬できる」「頼りになる」などの項目を含み、親に対する敬意や信頼を表しているように思われるため、『尊敬・信頼因子』と命名した。第2因子（4項目）は、「自分のことをだまってみ守ってくれる」「何でも好きにさせてくれる」「自分を子ども扱いしない」などを含み、親が子に一人前の人間として認め、自立の支援を表しているように思われるため、『自立支援因子』と命名した。第3因子（4項目）は、「いろいろなことを話しやすい」「友達のような関係だ」「よく一緒に出かける」などを含み、気兼ねない近くて親しい関係を表しているように思われるため、『友人様関係因子』と命名した。

また、本尺度の内的整合性を確かめるべく、信頼性分析によりクロンバックの α 係数を算出した結果、『尊敬・信頼因子』（ $\alpha = .94$ ）、『自立支援因子』（ $\alpha = .77$ ）、『友人様関係因子』（ $\alpha = .85$ ）と、それぞれに高い値を示した（表3）。

表 3. 父親イメージ各因子の因子負荷量と α 係数、因子間相関

項目	因子			共通性
	I	II	III	
I. 尊敬・信頼因子($\alpha=0.94$)				
A19 頼りになる	0.96	-0.04	-0.15	0.70
A20 約束を守る	0.92	0.00	-0.21	0.62
A15 尊敬できる	0.89	-0.03	-0.02	0.74
A17 将来そういう人になりたい	0.74	0.06	0.08	0.71
A9 自分が納得するまで説明してくれる	0.72	-0.05	0.04	0.51
A10 自分の将来について一緒に考えてくれる	0.64	-0.20	0.32	0.63
A24 自分を励ましてくれる	0.61	-0.02	0.23	0.60
A23 何か良いことをしたらほめてくれる	0.60	-0.01	0.14	0.49
A16 自分のことを信じてくれている	0.59	0.33	0.02	0.70
A1 家族を楽しくさせてくれる	0.56	-0.07	0.28	0.55
A14 自分のことを理解してくれている	0.53	0.23	0.19	0.70
A8 友達が家にくるのを喜ぶ	0.44	-0.04	0.14	0.27
A5 自分のしてほしいことをしてくれる	0.40	0.19	0.22	0.49
II. 自立支援因子($\alpha=0.77$)				
A12 目先のことをうるさく言わない	-0.10	0.83	0.09	0.61
A22 何でも好きにさせてくれる	0.05	0.72	0.00	0.43
A11 自分のことをだまってみ守ってくれる	-0.04	0.71	-0.09	0.66
A18 自分を子ども扱いしない	0.26	0.42	0.00	0.31
III. 友人様関係因子($\alpha=0.85$)				
A3 いろいろなことを話しやすい	-0.18	0.08	0.96	0.88
A4 いろいろなことを相談しやすい	-0.14	-0.05	0.91	0.84
A2 友達のような関係だ	0.22	0.12	0.63	0.44
A7 よく一緒に出かける	0.20	-0.10	0.49	0.42
因子間相関				
尊敬・信頼因子				
自立支援因子	0.58			
友人様関係因子	0.70	0.49		

(2) 親のイメージ調査尺度 (母親)

母親のイメージについて尋ねた親のイメージ調査尺度 (母親) でも、父親のイメージについて尋ねたものと同様、「一生懸命働いている」が天井効果を示したため、その 1 項目を除外した 23 項目で分析を進めることとした。それら 23 項目について、因子分析 (最尤法、プロマックス回転) を行い、スクリープロットから読み取れる固有値の減衰状況、因子の解釈可能性を考慮し、因子

数を3因子とした。また全ての因子において、因子負荷量が0.40を下回るものや、0.40以上の因子負荷量が2因子にまたがるもの2項目を削除し、21項目が残った。第1因子（12項目）は、「自分の将来について一緒に考えてくれる」「尊敬できる」「頼りになる」など、父親イメージの因子と同じ項目を含んでいた。父親イメージの因子との違いは、母親イメージの因子には「友達が家にくるのを喜ぶ」「自分のことを信じてくれている」の2項目がないことと、「自分の悪いところを注意してくれる」の1項目があることであった。父親イメージと同じく、親に対する敬意や信頼を示しているように思われるため、『尊敬・信頼因子』と命名した。第2因子（5項目）は、「自分の意見を尊重してくれる」の1項目のみ父親イメージより多く、その他は同じ項目を含んでおり、第3因子（4項目）は、父親イメージと同じ項目から構成されていたため、父親イメージと同じく、それぞれ第2因子を『自立支援因子』、第3因子を『友人様関係因子』と命名した。

また、本尺度の内的整合性を確かめるべく、信頼性分析によりクロンバックの α 係数を算出した結果、『尊敬・信頼因子』（ $\alpha = .92$ ）、『自立支援因子』（ $\alpha = .81$ ）、『友人様関係因子』（ $\alpha = .80$ ）と、それぞれに高い値を示した（表4）。

表 4. 母親イメージ各因子の因子負荷量と α 係数、因子間相関

項目	因子			共通性
	I	II	III	
I. 尊敬・信頼因子($\alpha=0.92$)				
B24 自分を励ましてくれる	0.84	-0.02	0.01	0.70
B19 頼りになる	0.81	-0.03	-0.15	0.50
B20 約束を守る	0.77	0.05	-0.09	0.55
B15 尊敬できる	0.76	0.11	-0.10	0.59
B23 何か良いことをしたらほめてくれる	0.65	-0.03	0.09	0.49
B6 自分の悪いところを注意してくれる	0.64	-0.33	0.19	0.42
B10 自分の将来について一緒に考えてくれる	0.63	-0.15	0.23	0.54
B14 自分のことを理解してくれている	0.59	0.26	0.03	0.62
B9 自分が納得するまで説明してくれる	0.56	0.03	0.10	0.42
B17 将来そういう人になりたい	0.54	0.19	0.09	0.54
B1 家族を楽しくさせてくれる	0.46	-0.02	0.16	0.33
B5 自分のしてほしいことをしてくれる	0.44	0.16	0.12	0.40
II. 自立支援因子($\alpha=0.81$)				
B11 自分のことをだまってみ守ってくれる	-0.07	0.82	0.06	0.66
B12 目先のことをうるさく言わない	-0.12	0.75	0.07	0.52
B21 自分の意見を尊重してくれる	0.31	0.58	-0.01	0.62
B22 何でも好きにさせてくれる	-0.09	0.57	0.10	0.33
B18 自分を子ども扱いしない	0.03	0.55	-0.14	0.26
III. 友人様関係因子($\alpha=0.80$)				
B3 いろいろなことを話しやすい	0.01	0.04	0.91	0.88
B4 いろいろなことを相談しやすい	0.08	-0.01	0.83	0.78
B2 友達のような関係だ	-0.04	0.21	0.50	0.36
B7 よく一緒に出かける	0.20	-0.07	0.40	0.27
因子間相関				
自立支援因子	0.56			
友人様関係因子	0.68	0.49		

(3) 家族機能自己記述尺度 (SMFF)

SMFFでは、1項目が天井効果を示し、13項目がフロア効果を示したため、それら14項目を除外した61項目で分析を進めるととした。61項目について、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い、スクリープロットから読み取れる固有値の減衰状況、因子の解釈可能性を考慮し、因子数を3因子とした。また全ての因子において、因子負荷量が0.40を下回るものや、0.40以上の

因子負荷量が2因子にまたがるもの28項目を削除し、33項目が残った。第1因子(21項目)は、「何か問題が起こっても、家族の人々は話し合ってみんなで解決策を生み出す」「私たちの家族では、お互いに助けたり元気付けることがよくある」などの項目を含み、『社会活動・凝集性因子』と命名した。第2因子(8項目)は、「家族の人々に何か厄介なことが起こると、それぞれがそこからうまく逃れようとする」「私の家族では、規則を破ると厳しく罰せられることがきまっている」などの項目を含み、家族ルールでの拘束や、家族成員間の回避を表しているように思われるため、『拘束性因子』と命名した。第3因子(4項目)は、「家族の人々は、それぞれの部屋をいつもきちんとしている」や「私の家庭では、よく家中ちらかっている(逆転項目)」を含み、『秩序因子』と命名した。

また、本尺度の内的整合性を確かめるべく、信頼性分析によりクロンバックの α 係数を算出した結果、『社会活動・凝集性因子』($\alpha = .92$)、『拘束性因子』($\alpha = .71$)、『秩序因子』($\alpha = .80$)と、『拘束性因子』の α 係数が若干低いものの、ある程度の内的整合性の高さを示していると考えられる(表5)。

表 5. SMFF 各因子の因子負荷量と α 係数、因子間相関

項目	因子			共通性
	I	Ⅱ	Ⅲ	
Ⅰ. 社会活動・凝集性因子($\alpha=0.92$)				
C1 私たちの家族では、お互いに助けたり元氣付けることがよくある	0.79	0.00	-0.05	0.6
C17 何か問題が起こっても、家族の人々は話し合ってみるで解決策を生み出す	0.79	0.04	0.04	0.61
C2 家族の人々は、心に思ったことを自由に話せる	0.77	-0.07	-0.17	0.6
C9 私たちは家族の一人一人がそれぞれの方向に伸びていくことをお互いに励ます	0.74	0.01	0.07	0.58
C16 私たちの家族では、一体感を持っている	0.71	-0.15	0.03	0.66
C32 家族の人々は問題を話し合い、そこでの結論や解決策にいつもみんなが賛成できる	0.67	0.12	0.14	0.45
C10 私の家族より、もっと強固的に暮らしている家族はないだろう	0.59	-0.12	0.09	0.49
C12 家族の人々は、生活の決まりを一緒に作っている	0.58	0.25	0.13	0.3
C64 私たちは、文化的活動にとっても興味を持っている	0.58	0.34	-0.11	0.23
C40 私の家族は、私が家族に望むことをほとんど持っている	0.58	-0.19	0.02	0.5
C8R 私たちは、生き生きと楽しく毎日を過ごしている	0.56	-0.17	0.17	0.55
C15 家族の人々は、お互いから離れることは難しいと思う	0.55	0.15	-0.08	0.22
C71 家族の人々は何かを決める前に、家族のほかの人から同意を得るべきだと考えている	0.54	0.33	0.01	0.21
C57 家族にとって重要な決定をする時、誰もが一言でも発言できる	0.51	-0.16	-0.09	0.35
C50 家族の人々は、趣味や興味として習い事をしたり講座を受けている	0.51	0.26	-0.06	0.18
C62R 私たちは、個人の抱えている問題についてお互いに話さない	0.50	-0.24	-0.05	0.43
C31R 私たちの家族は、一緒に何かをすることはしない	0.50	-0.33	-0.07	0.5
C47 私たちの家族で、自分の意見を誰もが表現することは大切である	0.50	-0.10	-0.08	0.29
C41R 家族の人々は何か決定するとき、お互いに話し合うことがない	0.45	-0.29	-0.04	0.4
C49 家族の人々は、音楽や美術・文学などが好きである	0.42	0.12	-0.08	0.12
C26 私たちの家族では、いつも家族全員がどこにいるか知っている	0.41	-0.01	0.13	0.23
Ⅱ. 拘束性因子($\alpha=0.71$)				
C39 何か家族で決定する時、私たちの努力だけではどうしようもできないような影響が強いと感じる	0.26	0.62	-0.02	0.28
C44 家族の人々は、何か悪いことをすると厳しく罰せられる	0.19	0.50	0.22	0.21
C13 家族の人々に何か厄介なことが起こると、それぞれがそこからうまく逃れようとする	0.07	0.48	-0.09	0.22
C29 私たちの家族では、規則を破ると厳しく罰せられることがきまっている	0.27	0.48	0.13	0.18
C56 家族の人々は、必要以上に独立しようとしている	-0.07	0.45	0.04	0.23
C55R 私たちの家族は、他の家族と同じくらい適応していると思う	-0.32	0.42	-0.06	0.45
Ⅲ. 秩序因子($\alpha=0.80$)				
C67R 私の家庭では、よく家中ちらかっている	-0.30	-0.15	0.88	0.72
C7 家庭で必要なものがあつた時、それをすぐにみつけることができるよういつも整理整頓されている	0.05	0.11	0.79	0.62
C37 家族の人々は、それぞれの部屋をいつもきちんとしている	0.06	0.09	0.66	0.44
C52 食後直ちに、食器はいつも片付けられている	0.02	0.04	0.60	0.36
因子間相関				
社会活動・凝集性因子				
拘束性因子	-0.54			
秩序因子	-0.33	-0.21		

(4) 各尺度に含まれる因子間相関の検討

親のイメージ調査尺度(父親)、親のイメージ調査尺度(母親)、SMFFの各因子間での相関を調べるため、ピアソンの積率相関係数を求めたところ、以下のとおりであった(表6)。

表 6 . 各尺度の因子間相関

	尊敬・信頼(父)	自立支援(父)	友人様関係(父)	尊敬・信頼(母)	自立支援(母)	友人様関係(母)	社会活動・凝集性	拘束性	秩序
尊敬・信頼(父)		0.55	0.73	0.49	0.26	0.29	0.62	-0.37	0.17
自立支援(父)	0.55		0.44	0.24	0.26	0.06	0.30	-0.30	0.04
友人様関係(父)	0.73	0.44		0.32	0.20	0.30	0.55	-0.28	0.00
尊敬・信頼(母)	0.49	0.24	0.32		0.54	0.68	0.59	-0.28	0.19
自立支援(母)	0.26	0.26	0.20	0.54		0.48	0.34	-0.23	0.03
友人様関係(母)	0.29	0.06	0.30	0.68	0.48		0.48	-0.18	0.07
社会活動・凝集性	0.62	0.30	0.55	0.59	0.34	0.48		-0.41	0.23
拘束性	-0.37	-0.30	-0.28	-0.28	-0.23	-0.18	-0.41		-0.09
秩序	0.17	0.04	0.00	0.19	0.03	0.07	0.23	-0.09	

*下線は $r \geq 0.4$

2. 同一性地位判定尺度の3変数による同一性地位による分類

同一性地位判定尺度における、『現在の自己投入』、『過去の危機』、『将来の自己投入の希求』の3つの水準に含まれる4項目を、それぞれ合計した結果、平均値と標準偏差は以下のようになった(表7)。

表 7 . 同一性地位判定尺度の3変数の平均値と標準偏差

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
現在の自己投入	4	24	17.1	3.4
過去の危機	8	24	17.5	3.2
将来の自己投入の希求	6	24	15.6	3.4

これら3変数を高群と低群に分け、それらの組み合わせから同一性地位を判定した。結果は次のとおりである(表8)。なお、性別×同一性地位で χ^2 検定(両側検定)を行った結果、5%の有意確率で有意であった($\chi^2=8.872, p<.05$)。また、残差分析の結果、同一性達成群と同一性拡散群で1.96を超える残差が確認され、男

性に同一性達成群が有意に多く、女性に同一性拡散群が有意に少ないことがこれによって示された。

表 8 . 性別 × 同一性地位のクロス表

性別	同一性地位				合計
	同一性達成	早期完了	モラトリアム	同一性拡散	
男性	46(32.4%)	30(21.1%)	22(15.5%)	44(31.0%)	142(100.%)
調整済み残差	2.1	1.5	-1.3	-2.0	
女性	37(21.9%)	25(14.8%)	36(21.3%)	71(42.0%)	169(100%)
調整済み残差	-2.1	1.5	1.3	2.0	
合計	83(26.7%)	55(17.7%)	58(18.6%)	115(37.0%)	311(100%)

3. 両親イメージが家族機能に及ぼす影響の検討

父親イメージと母親イメージが、家族機能の各因子に影響を及ぼしているかを検討するため、父親イメージと母親イメージの各因子を独立変数、家族機能の各因子をそれぞれ従属変数として重回帰分析を行った。

(1) 両親イメージが『社会活動・凝集性』に及ぼす影響について

従属変数を、家族機能の『社会活動・凝集性因子』とし、父親イメージの3因子と母親イメージの3因子の計6因子をステップワイズ法により投入し、重回帰分析を行った。

その結果、父親イメージと母親イメージともに、『自立支援因子』は除外され、父親の『尊敬・信頼因子』（ $\beta=.28, p<.01$ ）、母

親の『尊敬・信頼因子』（ $\beta=.29, p<.001$ ）、父親の友人様関係因子（ $\beta=.21, p<.001$ ）、母親の友人様関係因子（ $\beta=.15, p<.01$ ）でモデルが構成された（ $R^2=.53$ ）。なおVIF（Variance Inflation Factor）は1.95～2.64と低く、多重共線性は見られなかった。

(2)両親イメージが『拘束性』に及ぼす影響について

従属変数を家族機能の『拘束性因子』とし、父親イメージの3因子と母親イメージの3因子の計6因子をステップワイズ法により投入し、重回帰分析を行った。

その結果、父親の『尊敬・信頼因子』（ $\beta=-.34, p<.001$ ）、母親の『自立支援因子』（ $\beta=.15, p<.01$ ）でモデルが構成された（ $R^2=.16$ ）。なおVIFは1.07と低く、多重共線性は見られなかった。

(3)両親イメージが『秩序』に及ぼす影響について

従属変数を家族機能の『秩序因子』とし、父親イメージの3因子と母親イメージの3因子の計6因子をステップワイズ法により投入し、重回帰分析を行った。

その結果、母親の『尊敬・信頼因子』（ $\beta=.19, p<.01$ ）のみでモデルが構成された（ $R^2=.03$ ）。

4. 性別と同一性地位における両親イメージと家族機能の検討

性別と同一性地位によって、父親イメージと母親イメージの各因子の平均値に違いがあるかを検討するため、父親イメージと母親イメージの各因子を従属変数とした、性別(2)×同一性地位(4)の2要因の分散分析をそれぞれに対して行った。

(1) 同一性地位による、父親イメージの因子の検討

父親イメージの各因子を従属変数として、性別(2)×同一性地位(4)の2要因の分散分析を行った結果、性別×同一性地位の交互作用はいずれの因子でも見られなかった。

『尊敬・信頼因子』では、性別の主効果は見られず、同一性地位の主効果は、1%水準での有意差が見られた($F(3,309)=4.084, p<.01$)。

『自立支援因子』では、性別の主効果は見られず、同一性地位の主効果は、5%水準での有意差が見られた($F(3,309)=2.864, p<.05$)。

『友人様関係因子』では、性別・同一性地位のいずれの主効果も見られなかった。

有意差が見られた『尊敬・信頼因子』で同一性地位間の多重比較を Tukey の HSD 検定で行った結果、同一性達成群と早期完了

群の間に5%水準での有意差が見られ、同一性拡散群と早期完了群の間に1%水準での有意差が見られた(図1)。

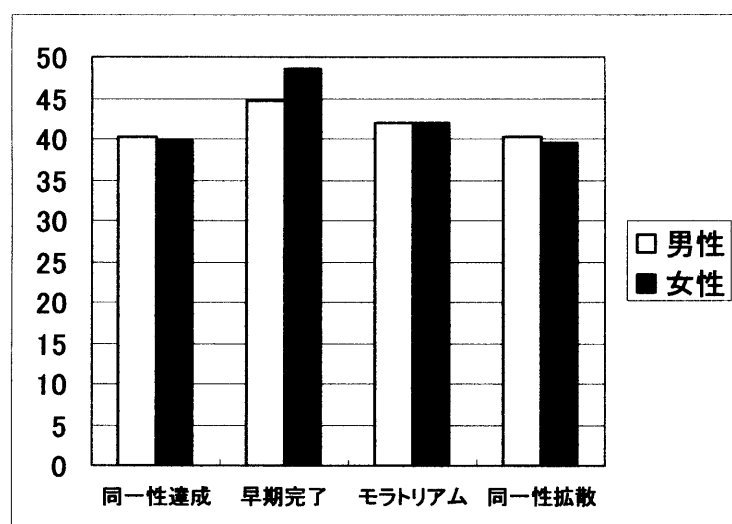


図3. 同一性地位ごとの父親の尊敬・信頼因子平均値

また、同じく有意差が見られた『自立支援因子』で、同一性地位間の多重比較をTukeyのHSD検定で行った結果、いずれの群間にも有意差は見られなかった。

(2) 同一性地位による、母親イメージの因子の検討

母親イメージの各因子を従属変数として、性別(2)×同一性地位(4)の2要因の分散分析を行った結果、性別×同一性地位の交互作用はいずれの因子でも見られなかった。

『尊敬・信頼因子』の性別の主効果は、1%水準での有意差が

見られ ($F(3,309)=8.310, p<.01$)、女性の方が男性よりも有意に高かった。同一性地位の主効果は 1 % 水準での有意差が見られた ($F(3,309)=4.398, p<.01$)。

『自立支援因子』の性別の主効果は見られず、同一性地位の主効果も見られなかった。

『友人様関係因子』の性別の主効果は、0.1% 水準での有意差が見られ ($F(3,309)=37.194, p<.001$)、女性の方が男性よりも有意に高かった。同一性地位の主効果は 5 % 水準での有意差が見られた ($F(3,309)=2.755, p<.05$)。

有意差が見られた『尊敬・信頼因子』と『友人様関係因子』で、同一性地位間の多重比較を Tukey の HSD 検定で行った結果、いずれの群間にも有意差は見られなかった。

(3) 同一性地位による、家族機能の因子の検討

SMFF の各因子を従属変数として、性別(2)×同一性地位(4)の 2 要因の分散分析を行った。

『社会活動・凝集性因子』の交互作用は見られず、性別の主効果は見られず、同一性地位の主効果は 5 % 水準での有意差が見られたため ($F(3,309)=3.697, p<.05$)、同一性地位間の多重比較を Tukey の HSD 検定で行った結果、同一性拡散群と早期完了群の間

に 1 % 水準での有意差が見られ、『社会活動・凝集性因子』は早期完了群の方が、同一性拡散群よりも有意に高いことが示された。

『拘束性因子』では、性別×同一性地位の交互作用が見られ ($F(3,309)=2.667, p<.05$) (図 4)、性別の主効果は見られず、同一性地位の主効果も見られなかった。

そこで『拘束性因子』の単純主効果を確認したところ、早期完了群における性別の単純主効果は、1 % 水準で有意差が見られた ($F(1,303)=8.258, p<.01$)。

また、どの部分に交互作用が見られたかを確認するため、『拘束性因子』について、平均の対についての検定 (性別(2)×同一性地位(4)の多重比較) を Bonferroni 法で行った結果、女性の同一性達成群と早期完了群の間に 1 % 水準での有意差が見られ、モラトリウム群と早期完了群の間に 5 % 水準での有意差が見られ、同一性拡散群と早期完了群の間にも 5 % 水準での有意差が見られた。また、女性における同一性地位の単純主効果は、1 % 水準で有意差が見られ ($F(3,303)=4.555, p<.01$)、女性の早期完了群はほかのいずれの群よりも有意に『拘束性因子』が高いことが示された。

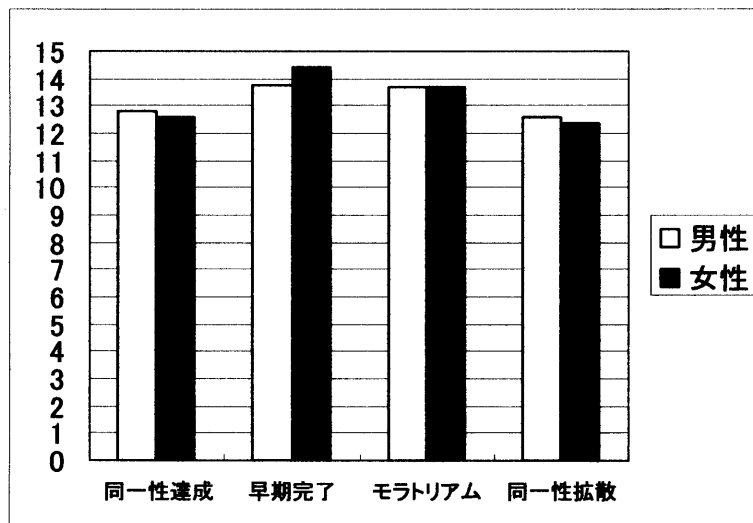


図 4. 同一性地位ごとの SMFF の拘束性因子平均値

『秩序因子』では、交互作用は見られず、性別の主効果は見られず、同一性地位の主効果は 0.1% 水準での有意差が見られた ($F(3,309)=6.449, p<.001$)。有意差が見られた『秩序因子』で、同一性地位間の多重比較を Tukey の HSD 検定で行った結果、同一性達成群と早期完了群の間に 5% 水準での有意差が見られ、モラトリアム群と早期完了群の間に 1% 水準での有意差が見られ、同一性拡散群と早期完了群の間にも 1% 水準での有意差が見られ、早期完了群はほかのいずれの群よりも『秩序因子』が高いことが示された。

表 9. 性別と同一性地位での分散分析結果

尺度	尊敬・信頼 (社会活動・凝集性)			自立支援 (拘束性)			友人様関係 (秩序)		
	性別	同一性地位群	交互作用	性別	同一性地位群	交互作用	性別	同一性地位群	交互作用
父親	n.s	**	n.s	n.s	*	n.s	n.s	n.s	n.s
母親	**	**	n.s	n.s	n.s	n.s	***	*	n.s
家族機能	n.s	**	n.s	n.s	n.s	**	n.s	***	n.s

+ $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

・家族機能の『拘束性因子』において、性別×同一性地位の交互作用が1%水準で見られた(同一性達成・モラトリアム・同一性拡散<早期完了

5. 同一性地位と各尺度の因子（高中低群）の母比率の差の検討

「結果4」では、各因子の得点を連続数として扱ったため、有意に高いもの、または有意に低いものを見出すことしかできず、同一性地位と平均値の中群との関連を、見ることはできなかった。そこで、父親イメージ、母親イメージ、SMFFの各変数での平均値±SDによって高中低群の3群に分けることとし、各因子×同一性地位で χ^2 検定（両側検定）を行った。父親イメージの『尊敬・信頼因子』（ $\chi^2=13.345, p<.05$ ）と、SMFFの『凝集性因子』（ $\chi^2=16.343, p<.05$ ）が5%水準で有意であり、母親イメージの『尊敬・信頼因子』（ $\chi^2=23.963, p<.01$ ）と、SMFFの『秩序因子』（ $\chi^2=22.468, p<.05$ ）が1%水準で有意であった。

残差分析では、残差が1.96以上のものを5%水準で有意、2.58以上のものを1%水準で有意、3.29以上のものを0.1%水準で有意とする。この基準により残差分析の結果を検討したところ、同一性達成群では、父親イメージでは有意差が見られず、母親イメ

ー ジの『尊敬・信頼因子』高群、母親イメージの『友人様関係因子』高群で5%水準での有意差が見られた。

早期完了群では、父親イメージの『尊敬・信頼因子』高群、父親イメージの『自立支援因子』高群、母親イメージの『尊敬・信頼因子』高群で1%水準での有意差が見られ、SMFFの『社会活動・凝集性因子』高群で1%水準、低群（負）で5%水準での有意差が見られ、SMFFの『秩序因子』高群と低群（負）で1%水準での有意差が見られた。

モラトリアム群では、母親イメージの『尊敬・信頼因子』低群で5%水準、SMFFの『秩序因子』低群で1%水準での有意差が見られた。

同一性拡散群では、父親イメージの『尊敬・信頼因子』高群（負）で5%水準での有意差が見られ、母親イメージの『尊敬信頼因子』高群（負）で0.1%水準、中群で1%水準、母親イメージの『自立支援因子』高群（負）、母親イメージの『友人様関係因子』高群（負）で5%水準での有意差が見られ、SMFFの『社会活動・凝集性因子』高群（負）で1%水準での有意差が見られた。

表 10. 同一性地位と父親イメージ高中低群の残差分析結果

	尊敬・信頼(父親)			自立支援(父親)			友人様関係(父親)		
	高群	中群	低群	高群	中群	低群	高群	中群	低群
同一性達成群	n.s	+(-)	+	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s
早期完了群	**	n.s	n.s	*	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s
モラトリアム群	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s
同一性拡散群	* (-)	n.s	n.s	+(-)	n.s	n.s	+(-)	n.s	n.s

+ $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表 11. 同一性地位と母親イメージ高中低群の残差分析結果

	尊敬・信頼(母親)			自立支援(母親)			友人様関係(母親)		
	高群	中群	低群	高群	中群	低群	高群	中群	低群
同一性達成群	*	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	*	n.s	n.s
早期完了群	**	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s
モラトリアム群	n.s	n.s	*	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	+
同一性拡散群	*** (-)	**	n.s	* (-)	n.s	n.s	* (-)	+	n.s

+ $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表 12. 同一性地位とSMFF高中低群の残差分析結果

	社会活動・凝集性(家族機能)			拘束性(家族機能)			秩序(家族機能)		
	高群	中群	低群	高群	中群	低群	高群	中群	低群
同一性達成群	n.s	+(-)	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s
早期完了群	**	n.s	* (-)	n.s	n.s	+	**	n.s	** (-)
モラトリアム群	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	**
同一性拡散群	** (-)	+	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s

+ $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

6. 同一性地位判定尺度の3変数の高群・低群における、両親イメージと家族機能の検討

「結果3」～「結果5」では、同一性地位判定尺度の3変数の高低で判定した同一性地位を分析に使用したが、より細かく見ていくため、「結果6」ではそれら3変数を分析に使用することとする。同一性地位判定尺度の3変数である『現在の自己投入』『過去の危機』『将来の自己投入の希求』の3変数の値の高低によって、両親イメージと家族機能の各因子の平均値に差が見られるかを確

かめるため、同一性地位の3変数を平均値で高群・低群に分け、性別(2)×同一性地位判定尺度の各変数の高低(2)の2要因の分散分析を行った。なお、性別を独立変数とし、両親イメージと家族機能の各因子を従属変数としていることが「結果4」と同じであるため、性別の主効果の結果は当然「結果4」と同じになっているが、交互作用を考慮するため記述しておくこととする。また、『現在の自己投入』『過去の危機』『将来の自己投入の希求』においても全て結果は同じであるが、上記の理由により記述しておくこととする。

(1)性別と『現在の自己投入』の高低による各因子の検討

父親イメージの各因子を従属変数にして、性別(2)×『現在の自己投入』の高低(2)での2要因の分散分析を行った結果、いずれの因子の交互作用、主効果でも有意差は見られなかった。

母親イメージの各因子を従属変数にして、性別(2)×『現在の自己投入』の高低(2)での2要因の分散分析を行った結果、交互作用はいずれの因子でも見られなかった。

『尊敬・信頼因子』では、性別の主効果で1%水準での有意差が見られ($F(1,307)=7.969, p<.01$)、女性の方が男性よりも有意に高いことが示された。『現在の自己投入』の高低の主効果で0.1%

水準での有意差が見られた ($F(1,307)=13.214, p<.001$)。

『自立支援因子』では、性別の主効果では有意差は見られず、
『現在の自己投入』の高低の主効果は5%水準での有意差が見られた ($F(1,307)=4.811, p<.05$)。

『友人様関係因子』では、性別の主効果は0.1%水準で有意差が見られ ($F(1,307)=41.563, p<.001$)、女性の方が男性よりも有意に高いことが示された。『現在の自己投入』の高低の主効果では1%水準で有意差が見られた ($F(1,307)=6.864, p<.01$)。

家族機能の各因子を従属変数にして、性別(2)×『現在の自己投入』の高低(2)での2要因の分散分析を行った。

『社会活動・凝集性因子』では、性別×『現在の自己投入』の交互作用が5%水準で有意差が見られ ($F(1,307)=5.201, p<.05$)、
『拘束性因子』『秩序因子』では交互作用は見られなかった。

『社会活動・凝集性因子』について、平均の対についての検定
(性別×同一性地位の多重比較)をBonferroni法で行った結果、
『現在の自己投入』の高群における、性別の単純主効果が1%水準で有意であった ($F(1,307)=6.797, p<.01$)。女性における、『現在の自己投入』の高低の単純主効果が1%水準で有意であった ($F(1,307)=10.793, p<.01$)。

また『社会活動・凝集性因子』の性別の主効果は見られず、『現

在の自己投入』の高低の主効果は5%水準で有意差が見られた
($F(1,307)=5.024, p<.05$)。

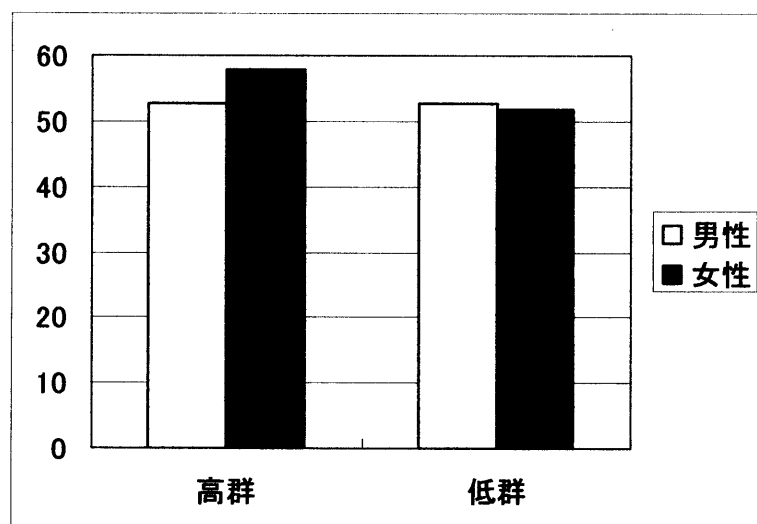


図 5. 性別×『現在の自己投入』の SMFF の社会活動・凝集性因子平均値

『拘束性因子』では、いずれの主効果でも有意差は見られなかった。

『秩序因子』では、性別の主効果は見られなかったが、『現在の自己投入』の高低の主効果では1%水準で有意差が見られた
($F(3,307)=9.180, p<.01$)。

(2)性別と『過去の危機』の高低による各因子の検討

父親イメージの各因子を従属変数にして、性別(2)×『過去の危機』の高低(2)での2要因の分散分析を行った結果、交互作用はいずれの因子でも見られなかった。

『尊敬・信頼因子』では、性別の主効果は見られなかったが、『過去の危機』の高低の主効果は5%水準での有意差が見られた($F(1,307)=5.394, p<.05$)。

『自立支援因子』と『友人様関係因子』では、いずれの主効果でも有意差は見られなかった。

母親イメージの各因子を従属変数にして、性別(2)×『過去の危機』の高低(2)での2要因の分散分析を行った結果、交互作用はいずれの因子でも見られなかった。

『尊敬・信頼因子』では、性別の主効果は1%水準での有意差が見られ($F(1,307)=4.296, p<.01$)、女性の方が男性よりも有意に高いことが示された。『過去の危機』の高低の主効果では有意差は見られなかった。

『自立支援因子』では、いずれの主効果でも有意差は見られなかった。

『友人様関係因子』では、性別の主効果は0.1%水準での有意差が見られ($F(1,307)=35.986, p<.001$)、女性の方が男性よりも有意に高いことが示された。『過去の危機』の高低では有意差は見られなかった。

家族機能の各因子を従属変数にして、性別(2)×『過去の危機』の高低(2)での2要因の分散分析を行った結果、交互作用はいずれの因子でも見られなかった。

『社会活動・凝集性因子』、『拘束性因子』では、いずれの主効果でも有意差は見られなかった。

『秩序因子』では性別の主効果は見られず、『過去の危機』では5%水準で有意差が見られた ($F(1,307)=3.906, p<.05$)。

(3)性別と『将来の自己投入の希求』の高低による各因子の検討
父親イメージの各因子を従属変数にして、性別(2)×『将来の自己投入の希求』の高低(2)での2要因の分散分析を行った結果、交互作用はいずれの因子でも見られなかった。

『尊敬・信頼因子』、『友人様関係因子』では、いずれの主効果でも有意差は見られなかった。

『自立支援因子』では、性別の主効果は見られず、『将来の自己投入の希求』では5%水準での有意差が見られた ($F(1,307)=5.620, p<.05$)。

母親イメージの各因子を従属変数にして、性別(2)×『将来の自己投入の希求』の高低(2)での2要因の分散分析を行った結果、交

相互作用はいずれの因子でも見られなかった。

『尊敬・信頼因子』では性別の主効果は5%水準で有意差が見られ ($F(1,307)=4.396, p<.05$)、女性の方が有意に高いことが示された。『将来の自己投入の希求』の高低では主効果は見られなかった。

『自立支援因子』ではいずれの主効果でも有意差は見られなかった。

『友人様関係因子』では性別の主効果は0.1%水準での有意差が見られ ($F(1,307)=35.248, p<.001$)、女性の方が有意に高いことが示された。『将来の自己投入の希求』の高低では有意差が見られなかった。

家族機能の各因子を従属変数にして、性別(2)×『将来の自己投入の希求』の高低(2)での2要因の分散分析を行った結果、相互作用はいずれの因子でも見られなかった。

『社会活動・凝集性因子』では性別の主効果は見られず、『将来の自己投入の希求』の高低では、5%水準での有意差が見られた ($F(1,307)=4.448, p<.05$)。

『拘束性因子』、『秩序因子』では、いずれの主効果でも有意差は見られなかった。

表 13. 性別での各因子の分散分析結果

尺度	尊敬・信頼 (社会活動・凝集性)	自立支援 (拘束性)	友人様関係 (秩序)
父親	n.s	n.s	n.s
母親	** (男性<女性)	n.s	*** (男性<女性)
家族機能	n.s	n.s	n.s

+ $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

表 14. 同一性地位判定尺度3変数の高低での各因子の分散分析結果

尺度	現在の自己投入の高低			過去の危機の高低			将来の自己投入の高低		
	尊敬・信頼 (社会活動・凝集性)	自立支援 (拘束性)	友人様関係 (秩序)	尊敬・信頼 (社会活動・凝集性)	自立支援 (拘束性)	友人様関係 (秩序)	尊敬・信頼 (社会活動・凝集性)	自立支援 (拘束性)	友人様関係 (秩序)
父親	n.s	n.s	n.s	*	n.s	n.s	n.s	*	n.s
母親	***	*	**	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s	n.s
家族機能	*	n.s	**	n.s	n.s	*	*	n.s	n.s

+ $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

・『現在の自己投入の高低』で家族機能の『社会活動凝集性』に1%水準の交互作用（女性の『現在の自己投入』の高低）が見られた。

7. 相談相手による、同一性地位判定尺度の3変数の差の検討

フェイスシートで尋ねた「進路など大切なことを相談する際の相手」×同一性地位判定尺度の3変数『現在の自己投入』『過去の危機』『将来の自己投入の希求』の高群低群の χ^2 検定（両側検定）を行った。なお、この項目に回答しなかったものは分析から除外した。

χ^2 検定の結果、『現在の自己投入』と『過去の危機』では有意差は見られず、『将来の自己投入の希求』において1%水準での有意差が見られた。『将来の自己投入の希求』での残差分析を行った

結果、「母親に相談する」の低群に 0.1% 水準での有意差が見られ、

「両親に相談する」の高群に 1 % 水準での有意差が見られた。

また、男女別にそれぞれケースを分割し、「進路など大切なことを相談する際の相手」×同一性地位判定尺度の 3 変数の高群低群の χ^2 検定（両側検定）を行った。

χ^2 検定の結果、男性ではいずれにも有意差は見られなかった。

また、女性では『将来の自己投入の希求』にのみ 1 % 水準での有意差が見られた。女性での『将来の自己投入の希求』の残差分析の結果、「母親に相談する」の低群に 0.1% 水準での有意差が見られ、「両親に相談する」の高群に 1 % 水準での有意差が見られた。

V. 考 察

1. 使用尺度の検討

(1) 親のイメージ調査尺度

長沢・渡辺（1996）では、本尺度は因子分析をされておらず、各項目と家庭生活の価値意識尺度との間で分析が行われていた。

本研究において、本尺度の因子分析を行った結果、父親のイメージを聞いた場合においても、母親のイメージを聞いた場合においても、『尊敬・信頼因子』、『自立支援因子』、『友人様関係因子』の3因子構造が確認されており、項目もほぼ同じであったため、因子としてのまとまりが十分であると考えられる。3つの因子間に強い相関が認められたことは、これら3つのイメージ特性は完全に独立しておらず、「友人のような親しい関係だからこそ、自立を支援してくれる親」であったり、「自立を支援してくれるからこそ、尊敬・信頼できる親」であったりすることを示しているように思われる。

『尊敬・信頼因子』に含まれる質問項目は、「頼りになる」「励ましてくれる」「ほめてくれる」といった、被験者である大学生が、親を「保護者」として見た像として捉えることができるだろう。被験者が、親を保護者として肯定的に捉える程度が高いほど、この得点が高くなっている。

また、母親の『自立支援因子』に含まれる質問項目は、「だまっ

て見守ってくれる」「目先のことをうるさく言わない」「意見を尊重してくれる」といった、被験者である大学生が、親に「一人前のおとな」として認めてもらえていると感じるイメージと捉えることができるだろう。被験者が親に、一人前のおとなとして認めてもらっていると捉える程度が高いほど、この得点が高くなっている。

『友人様関係因子』に関しては、両親ともに含まれる項目は完全に同じであった。『友人様関係因子』に含まれる質問項目は、「話しやすい」「相談しやすい」「一緒に出かける」といったものであり、被験者である大学生が、親を友人のような気楽な関係として感じるイメージを捉える因子と考えることができるだろう。被験者が親と気楽な関係であると捉える程度が高いほど、この得点が高くなっている。

(2) SMFF

渡辺（1989）や越知（2005）では、SMFFの因子は『凝集性』因子、『拘束性因子』、『社会活動性因子』の3因子構造が確認されたが、本研究では、「凝集性因子」と「社会活動性因子」はひとつとなり、下位特性のひとつであった、「秩序」がひとつの因子を構成し、『社会活動・凝集性因子』、『拘束性因子』、『秩序因子』の3

因子構造が確認された。

本研究における『社会活動・凝集性因子』は、15の下位特性のうち、結合性、表現性、知的文化的態度、活動的リクリエーションの態度、家族社交性、外的統制位置（逆転項目）、家族理想化、放任的家族形態（逆転項目）、民主的家族形態、纏綿性の10下位特性と幅広く含んでいる。これは、渡辺（1989）の「凝集性因子」に含まれる項目と「社会活動性因子」に含まれる項目に加え、渡辺（1989）では「拘束性」に含まれた纏綿性の項目「家族の人々はお互いから離れることは難しいと思う」をひとつ合わせたものであった。

越知（2005）でも、『凝集性因子』と『社会活動性因子』の相関は比較的強いことが確認されており（ $r=.52$ ）、家族がまとまるためのひとつの手段として、社会活動を行うことが挙げられるが、このことからこれら2因子がひとつの因子を構成したことも妥当であると思われる。

また、本研究における『拘束性因子』は、外的統制位置、家族理想化（逆転項目）、放任的家族形態、民主的家族形態（逆転項目）、遊離性、権威的家族形態の6下位特性を含んでおり、家族への不満やわだかまり、家族成員は家庭から離れようとしているが、罰則などに縛られているといった、否定的な側面が強調されている。

最後の『秩序因子』については、下位特性のひとつである「秩序」のみで構成されている。実際、下位特性「秩序」の項目を見てみると、「ちらかっている」「整理整頓されている」「部屋をいつもきちんとしている」「食器はいつも片付けられている」といった、直接的な人間関係としての家族関係を見ている項目というよりも、家の中が片付いており秩序だっているか、もしくはちらかっており混沌としているか、ということを表している。家全体や部屋の状態に、家族関係模様が表れており、『社会活動凝集性』や『拘束性』という概念だけでは表しきれない部分を示す概念として位置づけられるように思われる。

本研究では、『社会活動・凝集性因子』と『拘束性因子』にはかなりの負の相関が認められ、『社会活動・凝集性因子』と『秩序因子』の間には、弱いながら正の相関が認められ、『拘束性因子』と『秩序因子』の間にも弱い負の相関が認められていることは、これらの各因子のうち1つでも変化が起これば、他の因子にも変化が起こる可能性を示すものである。

以上のように、SMFFの因子のまとまり方が先行研究と異なる原因のひとつに、天井効果やフロア効果を示した14項目を分析から除外していることが考えられる。また、渡辺（1989）や越知（2005）では、因子分析を主因子法のバリマックス回転で行って

おり、本研究では最尤法のプロマックス回転で行っていることも関係しているであろう。だが、越知（2005）でも因子間の強い相関が認められており、本研究でも因子間に強い相関が認められているため、因子間の相関を仮定した斜交回転であるプロマックス回転を採用することは、適当だと考えられる。

(3)各尺度における因子間相関の検討

親のイメージ調査尺度（父親）、親のイメージ調査尺度（母親）、SMFFの各尺度間における因子間での相関係数で、 $r \geq 0.4$ だったものを取り上げると、尊敬・信頼（父）と尊敬・信頼（母）の間で高い相関を示しており、父親を尊敬・信頼していることと、母親を尊敬・信頼していることの関連が強いことが示されている。両親は互いに影響を及ぼしあう関係であり、「子はかすがい」と言われるように、子どもは両親関係自体を左右する大きな存在であり、逆もまたしかりであると言えるのではないだろうか。つまり、どちらか一方の親に対する尊敬・信頼が厚いことが、もう一方の親への尊敬・信頼も厚くするといった可能性が考えられる。また一方の親の持つ親としての機能が破綻した場合、もう一方の親の機能まで破綻してしまうことや、破綻した機能をもう一方の親が補償することによって、相対的にもう一方の親の尊敬・信頼が厚

くなるということも考えうる。

また、『社会活動・凝集性因子』は、『尊敬・信頼因子』（父）や『尊敬・信頼因子』（母）のほか、友人様関係（父）、友人様関係（母）との相関が強く、一方『拘束性因子』とは負の相関を示していた。これらのことから、父親や母親を尊敬・信頼していることや、友人のように仲の良い関係は、家族が「社会活動性」や「凝集性」をもつのに重要であることが考えられた。また、越知（2005）の結果と同じく、「拘束性」が、「社会活動性」や「凝集性」とは、相反するものであることが示された。

2. 両親イメージが家族機能に及ぼす影響の検討

(1) 両親イメージが『社会活動・凝集性』に及ぼす影響について

『社会活動・凝集性』は、両親の尊敬・信頼イメージや、両親との友人のような気楽な関係イメージによって予測しうることが示された。この結果により仮説1は支持された。これは、やはり両親との関係がいいということが家族をまとまらせ、家族での社会活動を活発にするという側面を表しているものであろう。

(2) 両親イメージが『拘束性』に及ぼす影響について

『拘束性因子』を予測するモデルとして、父親の『尊敬・信頼

因子』、母親の『自立支援因子』でモデルが構成されたものの重決定係数が低く、『拘束性因子』を予測するにはこれらの因子では不十分であった。『拘束性因子』を予測するのにどういった因子が適当であるかを検討することは、今後の研究課題だといえる。

(3) 両親イメージが『秩序』に及ぼす影響について

『秩序因子』を予測するモデルとして、母親の『尊敬・信頼因子』のみがモデルを構成する因子となったが、重決定係数は低く、『秩序因子』を予測するにはこの因子では不十分であった。『秩序因子』を予測するのにどういった因子が適当であるかを検討することは、今後の研究課題といえる。

3. 同一性地位による両親イメージと家族機能の検討

ここでは「結果4」と「結果5」を含めた、同一性地位による親イメージの差に関する考察を行うこととする。

(1) 同一性地位による親イメージの検討

本研究で最も顕著な差が見られた同一性地位は、早期完了群であった。分散分析と多重比較の結果、早期完了群は父親の「尊敬・信頼イメージ」が高く、 χ^2 検定では父親の「自立支援イメージ」が高かった。また、母親イメージの因子では分散分析に有意差は

あったものの、多重比較では群間に差は見られていないが、 χ^2 検定では、早期完了群での母親の「尊敬・信頼イメージ」が有意に高かった。母親の「自立支援イメージ」には有意差がなかったため、仮説 2 は部分的に支持されたといえる。

父親や母親を尊敬していることや、父親が子どもを一人前のおとなと見なし、自由にさせてくれることが、早期完了へとつながっているのだと考えられる。

同一性達成群は、早期完了群と同じように母親の「尊敬・信頼イメージ」が高いが、早期完了群との決定的な違いは、父親の「尊敬・信頼イメージ」が早期完了群よりも低い有意傾向があることと、母親の「友人様関係イメージ」が有意に高いことであった。これらのことから、母親を単なる尊敬・信頼の対象としている場合には早期完了につながりやすく、母親を尊敬・信頼しているが、話しやすい気楽な関係と認知している場合には同一性達成につながりやすいことが考えられる。また、父親への尊敬・信頼イメージが高いことが、同一性達成ではなく、早期完了になる可能性を強くするのであろう。よって、父親の「尊敬・信頼イメージ」や父親の「友人様関係イメージ」高群と関連は見られず、仮説 5 は支持されなかった。

モラトリアム群は、母親への尊敬・信頼イメージが顕著に低い

ことが見出された。モラトリアム群は、現在高い水準の自己投入を行っていないものであり、現在の自己投入を行うには母親を尊敬・信頼していることが重要なのであろうか。この変数レベルでの検討は「考察4」で行うこととする。

同一性拡散群は、分散分析と多重比較の結果では、父親への尊敬・信頼イメージが早期完了群と比べて顕著に低く、 χ^2 検定では両親の尊敬・信頼イメージや、母親の自立支援・友人様関係イメージが高くはないことが示されており、有意に低いという結果にはなっていない。単にこれらのイメージが、同一性を拡散させているというわけではないことを示していると思われる。だが、このことを逆に考えれば、両親の尊敬・信頼イメージや母親の自立支援・友人様関係イメージが高ければ、同一性の拡散になりにくいということを考えることもできるであろう。よって、仮説3は支持されなかった。

(2)同一性地位による家族機能の検討

早期完了群は、家族機能のうち『社会活動・凝集性』が同一性拡散群よりも有意に高く、『秩序』が他の3群よりも有意に高いことが示されている。このことは、渡辺（1989）で、早期完了群と結合性・家族理想化・権威的家族形態で、正の関係があったこと

や、中村・秋葉（1992）で「凝集性」が早期完了地位で最も高かったことと一致し、仮説4は支持された。これは、女性の早期完了群では同一性拡散群と比べて、家族の「凝集性」が高いことや、社会活動を家族で行うことが多いことを示しており、それらが高いことが、早期完了へと導くことが考えられ、逆に『凝集性』や『社会活動性』が低いことが同一性拡散へと導くことが考えられる。また『秩序』に関しては、『秩序』そのものが早期完了へと導くのではなくて、早期完了になりやすい家族風土が秩序を保ちやすいと考える方が自然であろう。

同一性達成群は、家族機能とはいずれにも有意な関連が見られなかった。よって、仮説6は支持されなかった。渡辺（1989）では、『社会活動・凝集性』が「社会活動性」と「凝集性」の2つに分かれていたため、「社会活動性」において同一性達成群との有意差が見られた。本研究では、この2因子がひとつになったことにより有意な差がなくなつたと考えられ、今後より検討を重ねていく必要があると思われる。

モラトリアム群は、上記で早期完了群より有意に『秩序』が低いとされた3群のうち、 χ^2 検定で家族機能の『秩序』が有意に低いことが唯一示されている。『秩序』は、早期完了群と他の3群との間での有意差であるが、モラトリアム群と『秩序』低群との

関連が強く見られた。『秩序』が保たれることは、モラトリウムから抜け出す1つのきっかけになりうるのであろうか。なお『秩序』は、渡辺（1989）においては下位尺度として扱われ、同一性地位との関連（相関係数）が検討されているが、低い相関が同一性達成地位に見られたのみであり、本研究とは異なる結果である。

同一性拡散群は、上記での『秩序』が有意に早期完了群よりも低いことが見られたことと、家族機能の『社会活動・凝集性』が有意に高くないことが示されたにとどまった。同一性拡散群が、両親イメージや家族機能の肯定的側面と正の関連がないことは確認されたが、中村・秋葉（1992）で示された「拘束性」の低さについては、本研究では認められなかった。今後さらに同一性拡散群との関連を検討していく必要がある。

また『拘束性』に関しては、性別×同一性地位の交互作用のみ認められ、女性の早期完了では有意に高かった。家族での拘束が強い場合、男性よりも同一性拡散が多く認められる女性では、『拘束性』の影響をより大きく受けて、早期完了地位になることを示していると考えられる。渡辺（1989）では、これらの因子を用いた分析は性別を考慮して行われておらず、渡辺（1989）でも性別を考慮した分散分析では有意な差が認められたかもしれない。

(3)同一性地位による両親イメージと家族機能についての考察

本研究では、早期完了群において最も顕著な結果が見られた。

父親と母親を尊敬・信頼し、父親が自立支援してくれるというサブシステムを含んだ家族システムは社会活動性や凝集性を持ち、家の中は秩序が保たれているという健全な家族形態を表しているように思われる。

それに対し同一性達成群は、父親への尊敬・信頼は低く、母親を尊敬・信頼し、話しやすい相手としているといった、母親との親密感が見られた。早期完了群のように両親を絶対視することなく、母親との気楽な雰囲気の中で同一性の達成がなされるのであろう。

モラトリアム群では上記2群とは異なり、母親を尊敬・信頼しておらず秩序も保たれていない。母親が家を守っていく機能を果たしえないため家は混沌とし、そのことから母親に対する尊敬・信頼感情は低く、確固たる家のバランスを欠いていることが、モラトリアムの状態に導いているものと思われる。

同一性拡散群では、両親をそんなに尊敬・信頼しているわけでもなく、母親が自立を支援してくれたり、話しやすいといったイメージも高くなければ低くもなかった。家族機能に関しても凝集性が高くないということのみにとどまっており、このことは、両

親に対する明確なイメージが描けていないことで家族としてのまとまりも薄く、両親イメージを含んだ家族へのイメージが固まっておらず、自分の生き方のイメージも固まらないことから同一性の拡散に関わっているように考えられる。

5. 同一性地位判定尺度の3変数の高低による、両親イメージと家族機能の検討

(1)『現在の自己投入』の高低による各因子の検討

『現在の自己投入』と大きな関連が見られたのは、母親の尊敬・信頼イメージ、自立支援イメージ、友人様関係イメージであった。母親の肯定的イメージ全てと正の関連があったことや、また家族の凝集性と秩序とも正の関連があったことから、これら母親の健全な機能や、家族がまとまり家の秩序が保たれていることが、大学生にとっての「現在」に自己投入を活発にすることを可能にしていると思われる。よって仮説7は支持された。

(2)『過去の危機』の高低による各因子の検討

『過去の危機』とは、父親の尊敬・信頼イメージとの関連がみられている。父親に尊敬・信頼感情を抱いているものは危機を経験しやすく、将来に対して真剣に思い悩む傾向にあると考えられ

る。性別での主効果や、性別との交互作用が見られないことから、父親への尊敬・信頼感は男女問わず、将来について思い悩むことを促進させるものである可能性が考えられる。

また、家族機能の『秩序』に有意差が見られた。家庭の『秩序』が保たれていることは、危機を経験する機会を得やすくしているのかもしれない。

(3)『将来の自己投入の希求』の高低による各因子の検討

父親の自立支援イメージとの関連が見られたことは、大学生にとって、将来の自己投入を希求するために、父親が拘束的でなく自立を支援してくれることが必要であることを示しているものと思われる。よって仮説8は支持された。

親はわが子を思って家庭のルールを厳しくしたり、つい「まだ子どもなんだから」といつまでも子どもとしてわが子を見てしまい、がんじがらめにしてしまうこともあるであろう。子どもが親離れすることも大事であるが、親が子離れすることも、子どもが将来を見据えて行動していくには大切なことであると思われる。

さらに、家族機能の『社会活動・凝集性』とも関連が見られた。このことは、家族が社会活動に積極的であり、家族がまとまっていることが、将来へ自己投入を希求するための風土となっている

ことが考えられる。

(4) 同一性地位判定尺度の各因子についての考察

以上の結果を大きく分けると、『現在の自己投入』には母親が、『過去の危機』と『将来の自己投入の希求』には父親が大きく関わっていた。これは、現実的にがんばっていくためには母親の様々な形での援助が必要であることを示しており、将来に向けて思い悩んだり、将来に夢や希望を抱いたりするためのモデルには、父親がなりやすいということを示しているであろう。

また、この3変数が家族のまとまりや秩序と関連していることは、これらの両親イメージの結果から得られる知見を参考に、家族全体としての機能をよりよくすること、つまりは家族全体がまとまり、秩序だつことが自我同一性の確立には重要だといえるだろう。

6. 相談相手による、同一性地位の3変数の差の検討

進路など大切なことを相談する際の相手による『現在の自己投入』、『過去の危機』では、全体においても男女に分けても有意差は見られなかった。よって、仮説9は支持されなかった。

また、『将来の自己投入の希求』が低いものは「母親に相談」し

ており、高いものは「両親ともに相談」していた。このことから、『将来の自己投入の希求』が高いものは、両親ともに相談していることが明らかになり、仮説 9 は支持された。

両親と相談できる関係性が確保されていることが、『将来の自己投入の希求』を高める要因とも考えられるが、『将来の自己投入の希求』が高いからこそ、両親ともに相談することも考えられるため、このことは今後の研究課題として残された。

「両親に相談する」ことは、片親に相談するよりも多くの視点を得られることや、2 者関係ではなく 3 者関係であるということから、複数人によるコミュニケーションが意見交換を活発にすることによって、『将来の自己投入の希求』を活性化させるのにつながっているのかもしれない。このあたりの複雑な部分は、質問紙調査によっては限界があり、「家族力動」という観点で 3 者以上の関係を細かく見ていくことは、今後の研究課題といえる。

VI. 結論

全体として、まず両親の尊敬・信頼イメージや友人のような親しく話しやすいイメージが、家族での社会活動やまとまりを表す社会活動・凝集性に影響していることがわかった。

モラトリアム群では、母親を尊敬・信頼していないものが多く、家族が秩序だっていないことが示された。また同一性拡散群では、父親の尊敬・信頼イメージが高くないことをはじめ、母親の肯定的イメージ全体が高くないことが示された。

一方、同一性達成群と早期完了群では、母親を尊敬・信頼しており、母親を友人のような話しやすい関係と認知しているものは同一性達成地位になりやすく、母親を尊敬の対象と認知しているものは、早期完了になりやすいことが示された。また、父親の尊敬・信頼イメージが低い場合、自ら同一性を達成させねばならず、父親が自立を支援してくれれば、同一性の早期完了につながるのだと思われる。

また、同一性地位を判定するための変数レベルでは、大学生が現在、自我同一性を確立しようと行動することには母親の肯定的イメージが関連し、危機の経験や将来へ夢や希望を抱くことには父親の肯定的イメージが関連していることがわかった。

大学生の現在の自我同一性確立への試みや、将来へ夢や希望を

抱くことには、家族がまとまっていることが関わっていることが確認され、大学生の現在の自我同一性確立への試みや危機の経験には、家族の秩序が関連していた。

現在の自我同一性の確立への努力には、母親機能が大学生を支えており、危機の経験や将来に向けては父親機能が大学生を導き、さらに現在の家族としてのまとまりや、家族が生活をおくる場が片付いており秩序だっていることが、健全な自我同一性の獲得には重要であることを示しているといえよう。

VII. 要約

本研究では、両親イメージと家族機能によって、大学生の自我同一性地位がどのように異なっているかを調べた。

父親イメージと母親イメージはそれぞれ『尊敬信頼因子』『自立支援因子』『友人様関係因子』の3因子、家族機能は『社会活動・凝集性因子』『拘束性因子』『秩序因子』の3因子に分かれた。両親の『尊敬・信頼』と両親の『友人様関係』は、家族の『社会活動・凝集性』に大きな影響を与えていることが明らかとなった。

自我同一性地位での分散分析では、父親の『尊敬・信頼』や家族の『社会活動・凝集性』『秩序』は早期完了群で高かった。

自我同一性地位を判定するための変数として用いた『現在の自己投入』は、母親の3因子全てと家族の『社会活動・凝集性』、『秩序』と有意であり、『過去の自己投入』では父親の『尊敬・信頼』と家族の『秩序』と有意であり、『将来の自己投入の希求』は、父親の『自立支援』と家族の『社会活動・凝集性』と有意であった。

同一性達成群では母親の『尊敬・信頼』と『友人様関係』が高く、早期完了群では両親の『尊敬・信頼』と父親の『自立支援』が高く、モラトリアム群では母親の『尊敬・信頼』が低く、同一性拡散群では両親の『尊敬・信頼』や母親の『自立支援』『友人様関係』が低かった。

VIII. 引用・参考文献

- ・ Beavers, W.E. Voelller, M.N. 1983 Family Models: Comparing and Contrasting the Olson Circumplex Model with the Beavers Systems Model. *Family Process*. 22, 85-98
- ・ Bloom, B.L. 1985 A Factor Analysis of Self-Report Measures of Family Functioning, *Family Process*, 24
- ・ Erikson, E.H. 1959 Identity and life cycle. New York: *International Universities Press*. (エリクソン, E.H. 自我同一性 小此木啓吾訳編 誠信書房 1973)
- ・ 加藤厚 1989 大学生における同一性の諸相とその構造 教育心理学研究 31(4), 292-302
- ・ Marcia, J.E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *J. Pers. Soc. Psychol.* 3, 551-558
- ・ 丸山明子・奇恵英 2006 青年期の家族サブシステム（母子・父子・両親間）と自我同一性の関連 福岡女学院大学院人文科学研究科「臨床心理学」紀要(3), 11-22
- ・ 文部科学省 2006 平成 18 年度 学校基本調査速報 参考図表, 卒業者数、就職者数及び就職率等の推移[中学校]
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/06080115/002/sanzu

・長沢由喜子・渡辺由貴 1996 中学生における家庭生活の価値意識の形成(第2報)－親のイメージとの関連を視点として－ 日本家庭科教育学会誌 第40巻 第1巻, 79-83

・内閣府 青少年育成ホームページ 2005 青少年の就労に関する研究調査(若年無業者に関する調査)(中間報告)
<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/shurou/chukan.pdf>

・中村淳子・秋葉英則 1992 青年期における家族機能認知について・自我同一性地位との関わりから・大阪教育大学紀要 第IV部門 41(1), 11-23

・越知照子 2006 家族機能からみた大学生の自我同一性の形成について 京都教育大学 修士論文

・Olson,D.H.,Sprenkle,D.H.& Russell.C.1979 Circumplex Model of Marital and Family Systems I: Cohesion and Adaptability Dimensions. Family Types and Clinical Applications. *Family Process*. 18,3-28

・Philip Barker(中村伸一・信国恵子監訳) 1993 家族療法の基礎 金剛出版／Philip Barker 1992 *BASIC FAMILY THERAPY*. Blackwell Science Ltd.

・斉藤誠一編著 2002 人間関係の発達心理学 4 青年期の人間関

係 培風館

- ・ 東京都生活文化局(編) 1985『大都市青少年の人間関係に関する調査—対人関係の希薄化の問題との関連からみた分析』 同局発行
- ・ 渡辺さちや 1989 家族機能と自我同一性地位のかかわり—青年期の自立をめぐる— 家族心理学研究 3(2), 85-95
- ・ 若島孔文・佐藤宏平・三澤文紀 2002 家族療法から短期療法 そして物語療法へ—家族療法の歴史と展開 長谷川啓三・若島孔文、事例で学ぶ家族療法・短期療法・物語療法 1章 1-27 金子書房
- ・ 吉川悟 1993 家族療法 システムズアプローチの<ものの見方> ミネルヴァ書房